

Title	テレビ放送のマルチメディア・コーパス : 映像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性
Author(s)	石井, 正彦
Citation	阪大日本語研究. 2009, 21, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10600">https://hdl.handle.net/11094/10600</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## テレビ放送のマルチメディア・コーパス —映像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性—

### A Quantitative Study of Language Use Based on a Multimedia Corpus of Japanese Television Broadcasts

石井 正彦  
ISHII Masahiko

キーワード：コーパス言語学、計量言語学、言語使用、テレビ放送、映像・音声、思考動詞「思う」

#### 要旨

国立国語研究所「テレビ放送の語彙調査」のNHK（総合・教育）分のデータを用いて、音声文字化テキストと映像・音声を同期させ、さらに、番組特性や話者属性の情報とも関連させて、単語の検索と同時に、その単語が発話されている映像・音声の再生もできる「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」を試作した。これによって、「どのような話し手が、どのような番組の、どのような場面で、どのような聞き手に向かって、どのような単語を、どのような文脈の中で、どのような音声で、どのような非言語行動（視線・表情・身振りなど）を伴いながら、発話したのか」といった検討が可能となり、単語使用の分析をより詳しく行うことができるようになる。たとえば、思考動詞「思う」が一人称主語の述語として表明する話し手の態度には、大きく「評価的態度」「認識的態度」「行為志向的態度」の3種があるとされるが、上記の試作版を使って「(～と) 思う」が発話される場面の映像を検索すると、評価的・認識的態度では専門家類や一般人類の、行為志向的態度ではアナウンサー類の発話が多く、また、評価的→認識的→行為志向的の順に視聴者に向かっての発話の割合が増えていく。テレビ放送では、「(～と) 思う」のムード的な態度の表明に関して、話し手の役割や（話し手・聞き手が構成する）ネットワークのあり方に違いのあることが予想されるのである。今後、試作版の内容を充実させるとともに、映像・音声を参照することで新たに可能となる単語使用の分析を積み重ねることによって、「マルチメディア・コーパス」を用いた計量的な言語使用研究の可能性を追究していくことが課題となる。

#### 1. 言語使用研究のためのコーパス

「コーパス」といえば、少なくとも現在のところ、新聞・雑誌・小説など、印刷媒体を中心とした書きことばのそれが中心であり、「自然な用例」の集積として、文法をはじめとする「言語構造」の研究に利用されることが一般的である。しかし、コーパスを用いた言語研究を、話しことばも含む、あるいは、むしろ話しことばを基本とする、「言語使用」

の研究にも拡大・発展させていくためには、言語形式が検索できるというだけでなく、その使用にかかわる各種の情報をも同時に得ることのできるコーパスが必要になる。

ただし、そうした「言語使用にかかわる情報」は、「言語使用」というものをどのように考えるか、そして、そもそも「コーパスを使ってどのような言語使用の研究を行おうとするか」によって、様々に異なってくることが予想される<sup>1)</sup>。たとえば、南(1987)が試案としてあげる「談話<sup>2)</sup>の十要素」(言語表現そのもの、参加者、話題、コミュニケーションの機能、表現態度、媒体、状況、ネットワーク、文脈、非言語表現)などは、そのような情報の候補になるだろうが、これらの情報をコード化し、コーパスに搭載することは、まだ行われておらず<sup>3)</sup>、当然、そうしたコーパスを使えばどのような言語使用研究が可能になるかという検討も、すべて今後の課題である。

このように、言語使用研究のためのコーパスがどのような情報を用意すべきかについては、将来の研究にまつところが大きい。ただ、そうした検討には、話しことばの場合、実際の発話場面における映像と音声を参照することが大いに役立つはずである。上の「談話の十要素」にも、表現態度、状況、ネットワーク、文脈、非言語表現など、談話行動場面の映像・音声から判断できるものが多い。したがって、当面は、音声文字化テキストから言語形式を検索すると同時に、その発話場面の映像・音声をも参照できる「マルチメディア・コーパス」をつくり、それを使って、どのような「言語使用にかかわる情報」を用意すべきかを検討することが考えられる。

以上のような問題設定のもと、筆者は、自身担当者の1人として参加した国立国語研究所「テレビ放送の語彙調査」のデータを利用して、単語の検索と同時に、その単語が発話されている映像・音声の再生もできる「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」を試作した。以下では、その概要を報告するとともに、それにより可能となる、新しい「コーパス言語学的な言語使用研究」の分析事例を紹介し、より高度なマルチメディア・コーパスに発展させていくための課題を述べる。

## 2. 「テレビ放送の語彙調査」とマルチメディア・コーパスの必要性

「テレビ放送の語彙調査」は、国語研究所が、テレビ放送における「単語使用」の実態記述を目標に行った(テレビ放送を対象とするものとしては)初めての本格的な語彙調査である。調査対象(母集団)は、1989年4～6月の3か月間に、全国放送網のキー局である6放送局7チャンネル(NHK総合・NHK教育・日本テレビ・TBS・フジテレビ・テレビ朝日・テレビ東京)が放送した、すべての番組(コマーシャルも含む)の語彙であり、

標本は、母集団となる放送を5分の幅をもつ抽出単位に分割し、それらを週・曜日・時間帯・チャンネルごとに等しくなるよう構成した集団から、504分の1の比率で無作為に抽出した。5分間の抽出標本の数は全部で364、総時間数は30時間20分。調査単位は、いわゆる「長い単位」の系列（ほぼ文節に相当）だが、より実質的な単語に焦点を当てるために、補助用言や複合辞の類も独立の単語と認めていない。標本延べ語数は、全体で141,975語、番組本編の音声で103,081語であり、同じく異なり語数は、全体で26,033語、番組本編の音声で17,647語である（国立国語研究所（1995・97・99））。

さて、テレビ放送は、言語と映像とによる複合的なメディア（マルチメディア）である。テレビで、音声により発話され、文字により提示される言語は、映像とともにより大きな情報を構成し、送出される。それは、入念に計画・演出された番組の言語においても、生放送の出演者の台本にない発話であっても、本質的に変わらない。テレビの言語は、どのようなときも、画面に映っている映像との関係の中に存在するのである。したがって、テレビ放送の言語を、映像から切り離し、それ自体で自律的なもの、完結したものとして扱うことは適当でない。それは、語彙調査においても変わらない。

しかし、「テレビ放送の語彙調査」当時は、単位切り・同語異語判別を施した音声文字化テキストを（実際の音声を伴う）映像と同期させることが技術的に困難であったため、番組ジャンルをはじめとする番組特性や、話し手の職業・性別・年齢等の話者属性などとの関係は探ったものの、個々の単語の使用を映像や音声を参照しながら検討するまでには至らなかった。テレビの単語使用を、言語としての側面だけではなく、映像との関係に規定されている側面をも考慮して明らかにしていくことが、課題として残されたのである。

### 3. マルチメディア・コーパスの作成

しかし、近年のコンピュータ技術・映像処理技術の進歩によって、パソコン環境でも、言語と映像とを関連づけた処理が可能になってきた。そこで、国語研究所とNHKの許可を得て、「テレビ放送の語彙調査」のNHK総合テレビ・同教育テレビのデータについて、音声文字化テキストと（実際の音声を含む）映像とを同期させ、単語を検索するとその発話場面の映像と音声再生できる「マルチメディア・コーパス」の作成に着手した。コーパスの規模は、音声の延べ語数で、NHK総合13,305語、教育13,631語、計26,936語（各52標本）である。

文字化テキストと映像との同期といっても、このデータ量で、単語単位で映像と関連づけるような精密な同期は難しい。そこで、ある見出し語を検索し、検索された単位語の一

つを指定すると、その単位語を含む「文」が発話されている映像・音声再生される、という程度の「同期」をめざすことにした。

具体的には、まず、標本の5分間の映像を10秒ごとのクリップに分割し、一方で、文字化テキストを文単位に分割して、一つ一つの文に、それが発話として含まれる映像クリップを対応づける（＝その開始時点と終了時点とを入力する）作業を行った。一つの文が複数の映像クリップにまたがる場合は、その文の開始時点を含むクリップと対応づけた。文の途中で10秒間の再生が終わってしまっても、すぐに続行することは簡単だと考えたからである。対応づけの作業には、(株)アイ・ビー・イー社製“IBE Outliner v2.2”を購入・利用した(図1)。

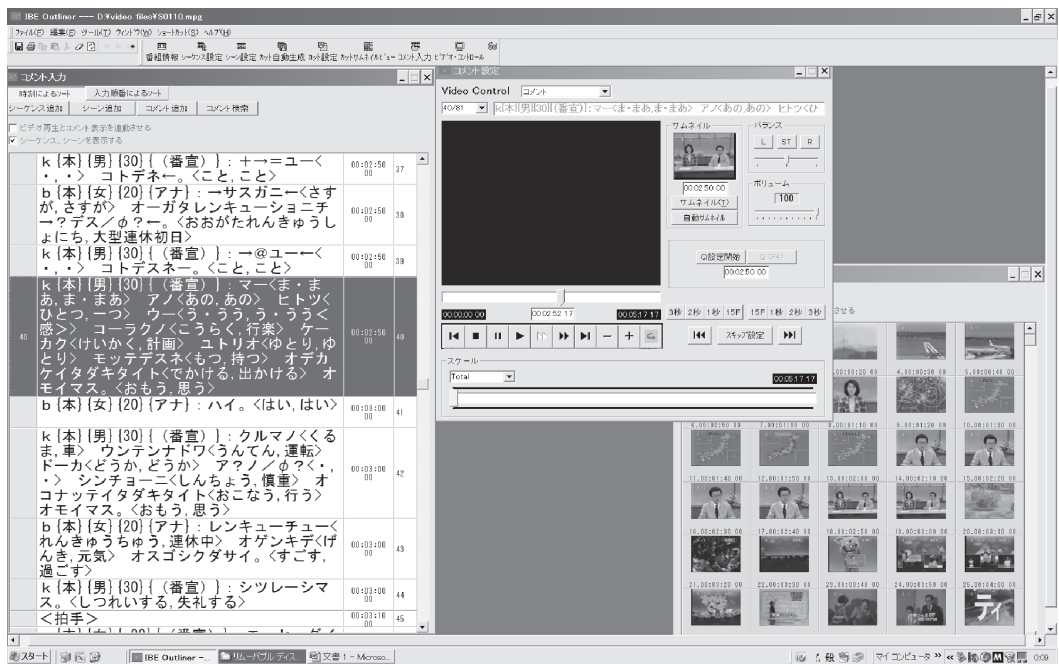


図1 IBE Outliner での対応づけの画面

次いで、延べ26,936の単位語を標本別・発話順に集めたデータベースに、それぞれの単位語（を含む文）に対応する映像クリップの開始時点と終了時点の情報を付与し、単位語の一つを指定すれば、それを含む（文を含む）映像クリップが再生されるようにした。単位語のデータベースはマイクロソフト社製“Microsoft Office Excel 2003”で作成し、映像クリップの再生には、オープンソースのメディアプレーヤー“MPlayer”（フリーソフトウェア）を用いた。

データベースには、単位語（出現形）のほかに、見出し語（読み・代表形）と語種・品詞情報、話者情報（性別、年齢、職業）、番組情報（ジャンル、チャンネル、曜日、時間帯、長さ、視聴率）を付与し、検索された単位語をこれらの情報でさらに絞り込んでから映像クリップを再生したり、逆に、これらの情報から（異なる見出し語の）単位語を絞り込んでその映像クリップを再生させたりできるようにした（図2）。現時点では、このデータベースを「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」の試作版とし、固有のインターフェイスは作成していない。

1	B	C	D	H	I	K	L	M	O	Q	R	S	AA
1	標本番号	文番号	CH	語種	品詞	出現形	読み	代表形	番組分類	職業(話者)	別(話者)	話(話)	mplayer_link
5919	S0079	55	1	W	4.32	エー	え・ええ	え・ええ<感>	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5920	S0079	55	1	H	1	ヨーシエングミノ	ようしえんぐみ	養子縁組	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5921	S0079	55	1	K	1.31	モンダイデスガ	もんだい	問題	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5922	S0079	55	1	W	4	ア	あ・ああ	あ・ああ<感>	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5923	S0079	55	1	H	1	カミヌマゾーダンインフ	かみぬまそうだん	上沼相談員	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5924	S0079	55	1	W	3.1	ドー	どう	どう	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5925	S0079	55	1	W	2.31	オカンガエデスカ。	かんがえる	考える	トーク	タレ	男	52	0079_55.bat
5926	S0079	56	1	W	4.32	エ。	え・ええ	え・ええ<感>	トーク	タレ	男	52	0079_56.bat
5927	S0079	57	1	W	1.3	カタオモイノ	かたおもい	片思い	トーク	タレ	女	34	0079_57.bat
5928	S0079	57	1	K	1.2	ダンセーガ	だんせい	男性	トーク	タレ	女	34	0079_57.bat
5929	S0079	57	1	W	2.12	オッテデスヨ+	ある	居る	トーク	タレ	女	34	0079_57.bat
5930	S0079	58	1	W	4.32	ハイ	はい	はい	トーク	タレ	男	52	0079_58.bat
5931	S0079	58	1	W	4.32	ハイ	はい	はい	トーク	タレ	男	52	0079_58.bat
5932	S0079	58	1	W	4.32	ハイ。	はい	はい	トーク	タレ	男	52	0079_58.bat
5933	S0079	59	1	K	1.2	+ジョセーニ	じょせい	女性	トーク	タレ	女	34	0079_59.bat
5934	S0079	59	1	W	3	コー	こう	こう	トーク	タレ	女	34	0079_59.bat
5935	S0079	59	1	W	1.31	オモイオ	おもい	思い	トーク	タレ	女	34	0079_59.bat
5936	S0079	59	1	W	2.16	ヨセル。	よせる	寄せる	トーク	タレ	女	34	0079_59.bat
5937	S0079	60	1	W	4.32	ン。	うん・ん	うん・ん<感>	トーク	タレ	男	52	0079_60.bat
5938	S0079	61	1	W	4.11	トコロガ	どころが	どころが	トーク	タレ	女	34	0079_61.bat
5939	S0079	61	1	K	1.2	ジョセーフ	じょせい	女性	トーク	タレ	女	34	0079_61.bat
5940	S0079	61	1	W	1.2	ワンマリ<あまり>	あまり	あまり	トーク	タレ	女	34	0079_61.bat
5941	S0079	61	1	W	1.3	スキジャナイト。	すき	好き	トーク	タレ	女	34	0079_61.bat
5942	S0079	62	1	W	4.32	ハイ。	はい	はい	トーク	タレ	男	52	0079_62.bat
5943	S0079	63	1	W	4.11	デ	で	で	トーク	タレ	女	34	0079_63.bat
5944	S0079	63	1	W	3.17	モー	もう	もう	トーク	タレ	女	34	0079_63.bat
5945	S0079	63	1	W	1.2	アマリニモ	あまり	あまり	トーク	タレ	女	34	0079_63.bat
5946	S0079	63	1	W	3.17	ンモ	もう	もう	トーク	タレ	女	34	0079_63.bat
5947	S0079	63	1	W	4.2	オキ	おき	おき	トーク	タレ	女	34	0079_63.bat

図2 テレビ放送のマルチメディア・コーパスの試作版（一部）

#### 4. 分析事例：テレビ放送における「(〜と) 思う」の使用

この試作版マルチメディア・コーパスを使うと、「どのような話し手が、どのような番組の、どのような場面で、どのような聞き手に向かって、どのような単語を、どのような文脈の中で、どのような音声（口調）で、どのような非言語行動（視線・表情・身振りなど）

を伴いながら、発話したのか」といった検討が、そこに収められた実例から効率的に行える（とくに、下線部分の情報は、実際の映像・音声を再生・確認することで、具体的に把握できる）ようになり、テレビ放送における単語使用のより詳しい分析が可能になる。

そうした新たに可能となる分析事例として、ここでは、宮崎和人（2001）を参考に、動詞「思う」が「～と思う」という形式で「一人称主語の思考態度を表明する」ときの言語使用について検討してみよう。

#### 4.1. 方法

テレビ放送の語彙調査で、「思う」は、使用度数633、使用順位20位で、動詞では、「する」「なる」「いう」「ある」に次いで、よく使われている。試作版には、そのうちの163例（NHK総合84例、教育79例）が収められている。

まず、見出し語「思う」を検索し、そのKWICを表示させて（図3）、引用節「～と」をとり、一人称主語の述語となっているものを絞り込む。これにより、108例が得られた。

標本No.	CH	見出し語	前文脈	キー	後文脈
344	3	思う	チュー コトモ ヨク アリマスカラー ソノ コトモ オボエテオイテホシート	オモイマス。	サー キョーフ フクソスーン ワリシ
18	1	思う	ニ キョーイクオ ヨク スルニワ ソーユー フタンオ カルク シテホシート	オモイマス。	※ ウーン。 ※ ソレフ セーフ
251	3	思う	ン。 ※ ウン。 ※ +ソーユーヨーナ ジキョーガ アツタラ イーナート	オモイマス。	※ ソー。 ※ アソー。 ※ →エ
156	1	思う	ス ヒョーゴケンイタミシノ バイオ レーニ トッテ エ オツタエシヨート	オモイマス。	マー オトシヨリガデスネー ネナイ
184	1	思う	ニ ホテルニ イル オーサキトクハインニ イマン ヨースオ キーテミヨート	オモイマス。	エー オーサキサン。 ※ ハイ。 ※
220	3	思う	※ マー ソンナ カンジノ フタツオネ+ ※ ハイ。 ※ +ヤッテミヨート	オモイマス。	※ ハイ。 ジャ サツク アチラニ
220	3	思う	ホンデ オソラクネー+ ※ エー。 ※ +コレガ チョーモーリヨヒダロート	オモイマス。	※ ハー。 ※ コンナ ウエノ ホー
22	3	思う	イト カンガエテイタユー コトオ オー オワカリニナッテイタダケルダロート	オモイマス。	デ コノ アソビガ ソー ワリアニ
22	3	思う	イテイル ツルクサ ソーユー オソラク ドーサオ マタ エンジンダロート	オモイマス。	ソシテ コノ ウタオ クリカエシ ク
180	3	思う	デスネ コノ サンパンメノ プンケーニツイテ エ ベンキョーシテイキタイ	オモイマス。	ソレデフ キョーフ ミナサン コノ
303	3	思う	ナ エーヨーキューシューノ イッシュンオ クローズアップシテイキタイ	オモイマス。	エー スタジオニ オイデイタダキマ
359	1	思う	オワロート オモイマスゲド トニカク ヘーボンデ アノー ヤッテイキタイ	オモイマス。	ドーモ。 <笑い> ※ ドーモ ア!
110	1	思う	ワー コーラクノ ケーカク ユトリオ モツテデスネ オデカケイタダキタイ	オモイマス。	※ ハイ。 ※ クルマン ウンデン
79	1	思う	ツネッ アノ コチラデ ミナサンガタニ サイカクニンオ シテイタダキタイ	オモイマス。	サー コノ バアノ ヨーシエンダミ
110	1	思う	ンデンナドフ ドーカ ア?ノ/φ? シンチョーニ オコナッテイタダキタイ	オモイマス。	※ レンキューチュー オゲンキデ
332	1	思う	ヨニ キュージョーキューネンマエノ ニッポンニ サナボツテイタダキタイ	オモイマス。	リポーターワ ハマナカアカウンサー
303	3	思う	ーソーイタシマシタ ア バングミノ ナカカラ イチブ ゴショーカイシタイ	オモイマス。	※ ハー。 <咳払い> ※ デ コ
327	1	思う	。 センザイナドデモ キョツクル コトガ アツタラ セヒ オネガイシタイ	オモイマス。	エー コーユー ゴシツモンデゴザイ
2	3	思う	ダスヨーニ ナルンデショールカ。 コノ コトオ スコシ カンガエテミタイ	オモイマス。	エ コレガ ウランノ ニヒャクサンジ
167	3	思う	ヨクギョーコーユーデ ガンバツテル ヒト?ダ/タ?ジオ トリアゲテミタイ	オモイマス。	※ ハイ。 エ キョー スタジオニ
34	3	思う	ー コトデ セーシキト ヨバレル シキニツイテ ベンキョーオ シテミタイ	オモイマス。	セーシキッテ ドンナ シキオ ソー
277	1	思う	※ →アー。 ※ →?ホー?。 ※ +アルンデ ショーカイシテミタイ	オモイマス。	※ <英語> ※ コノ ダフークラ
256	3	思う	イッシュニ イカレタ フタリノ カタニモ オハナシオ ウカガッテミタイ	オモイマス。	※ <手話> ※ <通訳> ウタ
168	1	思う	ワ カチーオ マモル シュフノ カタニ オ▲ オハナシ ウカガッテミタイ	オモイマス。	※ アノー マイニチノ セーカツニ
168	1	思う	バシクノ チョーナイカイノ カタガタノ イケンオ マズ ウカガッテミタイ	オモイマス。	コバヤシサン。 ※ ハイ。 エ ソレ
230	3	思う	ケレドモ コノ ウタオ ミナサント イッシュニ コレカラ ウタッテミタイ	オモイマス。	エ ソレデワー マ▲ マズ サイシ
230	3	思う	ケレドモ コノ ウタオ ミナサント イッシュニ コレカラ ウタッテミタイ	オモイマス。	エ ソレデワー マ▲ マズ サイシ
167	3	思う	ー イッボンズリデー ヤッバリ ジパンノ テデー サカナオ ツッテミタイ	オモイマス。	※ イチヨー ダイガク イコート オ
230	3	思う	ワレテル ウタデスネー エ カンタンニー チョット カシオ ミチミタイ	オモイマス。	ウイシャルオーバーカムトユー オ
230	3	思う	> ※ ハイ ソレデフ イツモノヨーニ ワンナップコーナーニ ウツリタイ	オモイマス。	エー キョーフ マター ウタオ ヒト

図3 「思う」のKWIC(部分)

なお、ここでは、スル形式の「思う」のほか、「思うのだ」や（「思う」と言い換えられる）「思っている」という形式も含め、さらに、それらに「が」「け（れ）ども」「し」「から」「の」などの接続助詞が続く場合も含めることにする（否定や疑問の形式は含めない）。また、

当然のことながら、ドラマ・映画・アニメなどでの（シナリオのある）発話は除く。

「思う」は、他の思考動詞と同様、スル形式をとって一人称主語の述語となると、発話行為時現在の話し手の思考活動を表すが、宮崎（2001）によれば、それは「話し手がどのような思考的態度や立場をとるかということ」を他者（聞き手）に向けて表明する」モード性（態度表明性）を表すことを基本とするという。そして、この「（～と）思う」の表明する話し手の思考態度や立場は、その引用文によって、まずは、以下のように、「評価的態度」「認識的態度」「行為志向的態度」の3種に大別されるとする（例文は、試作版マルチメディア・コーパスから）。

(1) 評価的態度（を表す文）

- a) ダイガクノ ジュケンセード ジタイオ カエナキャイケナイト オモイマス。  
 b) コガイデ ゼンシンウンドーオ スルトユー コトワ ヒジョーニ タイセツダト オモイマス。

(2) 認識的態度（を表す文）

- c) ソーユー コトオデスネ ツネニ イシキシテイタダケレバデスネ ジコモ スコシワ ヘルト オモイマス。  
 d) タンボノ イネノ クキニ ハイマツワリハイマツワリシテ カラミツイテイル ツルクサ ソーユー オソラク ドーサオ マタ エンジタンダロート オモイマス。

(3) 行為志向的態度（を表す文）

- e) エー キョーワ マター ウタオ ヒトツ ミナサント イッショニ ウタッテミタイト オモイマス。  
 f) ソレデワ ヒトツネッ アノ コチラデ ミナサンガタニ サイカクニンオ シテイタダキタイト オモイマス。

宮崎（2001）は、この3分類を出発点としつつ、それぞれの文に付加されるスル形式の「（～と）思う」の働きを詳しく記述し、さらに、「思う」のシテイル形式やシタ形式が否定文や疑問文で使用される場合などを幅広く観察して、そこに「思う」固有のモーダルな用法・機能を見出している。ただし、ここでは、そうした詳しい分析にもとづくことはせず、K W I Cから得られた108例の（一人称主語の述語である）「（～と）思う」を、上記3種の態度の下に分類するとともに、それぞれの発話の映像・音声を再生し、まずは、どのような話し手が、どのような聞き手に向かって、いずれの態度を表明しているかを調べてみる。



「話し手」の分類については、その職業と番組中での役割との二つの観点から行うことができる。役割の方が単語使用に直接的にかかわっていると考えられるが、たとえば、トーク番組の司会をアナウンサーが務めたときとタレントが務めたとき、あるいは、そのゲストがタレントであるときと専門家であるとき、さらには一般人であるときなどでは、単語使用に違いが生じることも想像される。また、アナウンサーは番組によってその話し方を変えるのに対して、タレントはあまり変えない可能性があるとの報告もあり、職業と役割のどちらが単語使用により深く関与しているのか、簡単にはいえない。

ただし、実際の番組を検討すると、アナウンス番組でアナウンスするのはアナウンサーであり、解説・講義番組で講師を務めるのは専門家であるというように、職業と役割とはある程度対応している。そこで、ここでは、分類があまり細かくなならないことと判別のしやすさを理由に、職業において話者を分類することにする。得られたのは、以下の4分類である<sup>4)</sup>。

- (1) アナウンサー類……アナウンサーのほか、キャスター、レポーター、司会者などを  
含む。
- (2) タレント類……いわゆるテレビ・タレントのほか、俳優、声優、コメディアン、漫才師、  
落語家、歌手などを含む。
- (3) 専門家類……大学教授、医師、科学者、評論家、芸術家、小説家、政治家、プロ野  
球解説者など。
- (4) 一般人類……テレビに出演することが通常ない一般の人々。

試作版マルチメディア・コーパスにおいて、話者の職業が特定できたものは、26,936語中、25,281語であり、その内訳は、表1のようになる。これを、「テレビ放送の語彙調査」全体における内訳(表2)と比べると、タレント類の発話が少なく、専門家類の発話が多い。これは、NHKの特徴であり、試作版の利用においても注意を要する。

一方、「聞き手」については、ここでは、試作版マルチメディア・コーパスで検索した映像をもとに、「話し手が『(~と) 思う』を発話した時点で、その視線を向けている相手」とみなすことにしたい。テレビ放送では、最終的な聞き手は、もちろん、視聴者である。しかし、実際の発話場面で話し手に同席する者がいる場合には、話し手は、視聴者だけでなく、同席者をも聞き手として発話することになる。このとき、視聴者も同席者もともに聞き手なのであるが、話し手は、「直接の聞き手」が視聴者であるか同席者であるかによって、言語使用を変えることが多い。そこで、話し手が、視聴者・同席者いずれを直接の聞き手として発話しているのかを、話し手の視線がどちらに向けられているかによって、

表1 話者分類と延べ語数（NHK総合・NHK教育）

職業	延べ語数	比率（%）
アナウンサー類	7830	31.0
タレント類	4464	17.6
専門家類	10587	41.9
一般人類	2400	9.5
計	25281	100.0

表2 話者分類と延べ語数（全体）

職業	性別	延べ話者数	延べ語数	比率（%）
アナウンサー類	男	246	22155	34557 33.5
	女	204	12402	
タレント類	男	547	23583	35578 34.5
	女	335	11995	
専門家類	男	176	19730	22994 22.3
	女	20	3264	
一般人類	男	191	4820	8064 7.8
	女	138	3244	
その他（分類不能）		229	1888	1.8
計		2086	103081	100.0

判別することにしたのである。なお、発話に伴う視線には「説得」などの機能が生じるといわれるが（Richmond & McCroskey 2003）、ここでは、そうした非言語行動としての視線の機能には、立ち入らないことにする。あくまで、直接の聞き手を示す非言語行動としてのみ視線を扱うということである。

#### 4.2. 結果

調査の結果は、表3のとおり。表中、“→”の左が話し手、右が直接の聞き手であり、（ ）内の数値は、話し手の視線が映像に映っていないが、話し相手としての聞き手が同定できる場合の数である（外数）。

これをみると、まず、評価的態度を表明する「（～と）思う」は、専門家類や一般人類が同席者に向かって発話した例が多数を占める。認識的態度も、同じように、専門家類や一般人類が同席者に向かって発話した例が多いが、専門家類が視聴者に向かって発話した例も少なくなく、その点で、評価的態度と異なっている。行為志向的態度は、アナウンサー類および専門家類が視聴者に向かって発話した例が多く、前二者の態度ときわだった違

表3 「(～と) 思う」が表明する(引用文の)態度と話し手・聞き手

(1) 評価的態度 (31例)		(2) 認識的態度 (41例)		(3) 行為志向的態度 (36例)	
専門家類→同席者	10 (6)	専門家類→同席者	13 (5)	アナウンサー類→視聴者	11
一般人類→同席者	9	一般人類→同席者	7	専門家類→視聴者	6 (2)
専門家類→視聴者	3	専門家類→視聴者	6 (5)	専門家類→同席者	4 (2)
タレント類→同席者	1	アナウンサー類→同席者	3	一般人類→同席者	3
アナウンサー類→視聴者	1	タレント類→同席者	1	タレント類→同席者	2
その他	1	アナウンサー類→視聴者	1	タレント類→視聴者	1
				その他	5

いを見せている。このように、テレビ放送における「(～と) 思う」の使用には、いずれの態度も専門家類の発話が多く、タレント類の発話が少ないが、評価的・認識的態度の場合は一般人類の発話も多く、また、行為志向的態度の場合はアナウンサー類の発話が最も多くなる、という話し手の違いのほかに、評価的→認識的→行為志向的の順に視聴者に向かっての発話の割合が増えていく、という(直接の)聞き手の違いが見出せる。

以下、それぞれの態度ごとに、やや詳しく検討する。その際、例として紹介する文字化テキストは、原則として、1人の話し手のひとまとまりの発話を1レコード(1論理行)とし、話し手が代わるたびに別レコードとしている。また、用いる記号類の凡例は、以下のとおり。

- 。(句点) 文の終わり
- “ ” (空白) 単位語の切れ目
- ＋ 発話の分断
- = 単位語の分断
- △ 単位語の途中からの発話の開始
- ▲ 単位語の途中での発話の終了、または、言いさし・言いづまり
- ： 話し手の交替
- (文字列) ← 発話の重なり部分
- ? (文字列) ? 不確定な発話(候補が複数の場合は、“ / ”で区切る)
- < > (全角) 担当者による注記・注釈

#### 4.3. 評価的態度

まず、評価的態度を表明する「(～と) 思う」には、専門家類が同席者に向かって発話

した例が最も多い。例①は、女性の栄養学の専門家（a）が、同席する女性の聞き手（b）に向かって「～と思いますね」と発話し、それに対して、聞き手も「はい」と答えている。

①標本0294 「おかあさんの勉強室」

a : デ コレダケデ モー ヤハリ ザイリヨーガ シチハッシュルイ。 →ハイ  
←。

b : →ソーデスネ←。

a : ト<接続詞> サンジュッヒンモ= ン▲ =クノ ナカデ カルシュームモ  
オークッテ シカモ アノ ザイリヨーガ カナリ イッピンデ+

b : エー。

a : +タクサン ハイリッテユーノワネ コドモたちワ アンマリ アレコレ タ  
ベラレマセンノデ+

b : ソーデスネ。

a : +デキタラ ソーユーフーニ+

b : ハイ。

a : +ニシュルイノ ウチノ ヒトツワ タクサン グガ ハイッテル モノノ  
ホーガ+

b : イーデスネ。

a : +イーンジャンイカナト オモイマスネ。

b : ハイ。

また、一般人類が同席者に向かって発話したのもも多い。一般人類の延べ語数の比率が小さいこと（表1）を考えれば、評価的態度を表明する「（～と）思う」の一般人類による使用は、期待割合に比べればかなり高いことになる。例②は、天安門事件の際に、日本で開かれた集会の男性参加者（f）がインタビューに答えたものである。この例のように、一般人類が「（～と）思う」を使う場合は、同席者としてのインタビュアーや司会者に答えるものが多い。

②標本0264 「7時のニュース・天気予報」

f : オソラク コノヨーナ グンタイ アルイワ コノヨーナ セーフワ アノー  
ダイニジセカイタイセン トキノ ヒットラーイジョーノ イジョーニ  
ヒドイ モノダト オモイマスシ イマノウチニ カナラズ チカイ ウチ  
ニ タオレル モノダト シンジテイマス。

一方、アナウンサー類やタレント類の発話は少ない。これらの話し手は、評価的態度を表明する役割・立場に立つことが少ないということだろう。ただし、民放の場合には、タレント類の発話は増えるかもしれない。例③は、男性タレント（b）が、スタジオでの座談会で司会を務めたときの発話である。

③標本0251「青春すくらんぶる」

b：→エー ソコマデ ホント ミトメテクレル←。 ネー ワカッテクレルヨ  
ーナ ヒトガ メンセツカンノ ナカデ →ドレダケ イルガツツノガ ス  
ゴク←+

多：→<笑い>←

f：→ソー。 ソー。 ソー。 ……←。

b：+ギモンオ カンジテシマウンデスケドネ。 ホント ミンナ アノー マ  
オレラナンカニワ アジワエナイヨーナネ カイガイタイケンオ シテキテ  
ー+

?：ンー。

b：+ソレガ スゴク アノー ニホンデネ オレラガ アタリマエニネ メンセ  
ツスレツ タラ<言ったら> カミ キリマスヨ ホントニ ミンナ アタ  
リマエノヨーニ。 デモ ソレニ タイスル コノ ヒハンセーシンミタイナ  
オカシーンジャナイカナミタイナ キモチオ モテルダケデモ スゴイ  
ゴドダナト+

?：ンー。

b：+オイモイマス。

いずれにせよ、評価的態度を表明する「(～と)思う」が、視聴者に向かって発話されることは少ない。専門家類の3例のうち2例(表3)は、例④のように、男性専門家(a)が1人でカメラ(視聴者)に向かって発話したものであり、どちらも「思うのだ」という形式になっている。

④標本0270「テレビコラム」

a：(略) ソレカラ アトワ コレワ ヒジヨーニ キケンナ コトナンデスガ  
エー クルマガデスネ ブツカラナケレバ モー ナニオ シテモイトユ  
ー シンリガ オキテキテマシテデスネー。 エー コーサテンナンカデモ  
エー クルマト クルマガデスネ ホント モー ゴジュッセンチグライデ

デスネー ギリギリノ トコロデ スレチガッター スル バアイガ アン  
 デスガ コレモ ブツカラナケレバ イートユー カンカクガ オキテキマ  
 スンデ ソノ キケンニ タイスル ネ ニンシキ。 コレオデスネ カナリ  
 エービンニ シテオイテ キケンダト オモウ コトワ イッサイ シナ  
 イヨーニ シナイトイケナイト オモウンデスネ。

また、例⑤は、女性アナウンサー（b）が座談形式の番組で司会を務めたときの発話であり、番組進行に関する発話の直前に行われたものである。なお、この「国にもいろんな方策を考えてほしいと思う」は、7ページの（3）f「それでは……こちらで皆さん方に再確認をしていただきたいと思う」と違って、「行為遂行の予告」（宮崎2001、p.119）とはいえないので、行為志向的態度ではなく、評価的態度に分類した。

#### ⑤標本0018「おかあさんの勉強室」

a : △シテ ドンドン コーガクヒノ セーサクオ ヤッテイルト＝+

b : ハイ。

a : +=ユー ジツジョーデスネー。

b : ナルホドネー。

a : ハイ。

b : マー クニニモ イロンナ コー ホーサクオ カンガエテホシート オモウ  
 ンデスケレドモ サシアタリ イマ コドモオ カカエテ キョーイクシテ  
 ル オカーサンタチワ コノ カケーオ アッパクスル キョーイクヒ ド  
 ー カンガエタラ イーノカ センパイオカーサンタチノ ハナシオ チョ  
 ット キーテキマシタ。

#### 4. 4. 認識的態度

認識的態度を表明する「(～と) 思う」も、評価的態度の場合と同じく、専門家類・一般人類の、いずれも、同席者に向けた発話が多く、この二つで全用例数のほぼ半数を占める。例⑥は女性の専門家（b）の、例⑦はインタビューに答える男性の一般人（c）の発話である。

#### ⑥標本0194「くらしの経済セミナー」

a : ナルホド。 ソレデ カッコクノ ショーヒシャダントイノ トリクミッテノ  
 ワ ドーナンデスカ。

b : ソーデスネー。 コレニ タイオーシテ コードーオ オコソート=+

a : エー。

b : +=ユー ダンタイモ アリマスシ マダ コレカラトユー ダンタイモ ア  
リマス。 ゼンゼン ムカンシンナ ダンタイモ アルトユー ジョーキョー  
デス。

a : アー ソーデスカ。 ニッポンワ ドーデスカ。

b : ニホンワ マ ケントーシテマシテ コレカラ+

a : エ。

b : +アノー コードーオ オコスンジャナイダローカト オモッテオリマスガ。

⑦標本0235「関東甲信越ネットワーク」

c : マ トカイノ ヒトたち?バ? コレ ミタ トキニ アー コンナ リッパ  
ナ モノオ ナゼ ツブスンダロート= マー =ユーヨーナ コトオ オ  
ー オモオト オモイマス。 シカシ ケツロンワ ノコシテ カツヨーオ  
スルニワ カネガ カカル。 ソノ カネワ ジャー ダレガ ダスカト。

アナウンサー類が同席者に向けて発話することは少ないが、得られた3例(表3)は、いずれも、ニュース番組で、キャスター間、あるいは、キャスターと(取材に当たった)記者との間の会話で行われている。例⑧は、男性キャスター(b)の質問に、男性記者(c)が答えたものである。

⑧標本0184「NHKニュース・トゥデー」

b : デー サテ ハシモトサン アノー キョーデスネー ソノ ヒギシャトシ  
テ トリシラベオ ウケタ フタリノ ダイギシ セージカ。 コノ フタリ  
ノ アツカイワ ドー ナルン→デシヨウ コレカラ←。

c : →ソーデスネ←。 アノー トーキョーチホーケンサツチヨードワ アシタ  
モ オー フジナミダイギシ イケダダイギシ フタリノ トリシラベオ  
ツズケル ヨテーデシテ マ ソノ アトワ カンケーサキノ カタクソー  
サクオ シテ コノママ タイホシナイデ ザイタクノ ママニ エ シュ  
ーワイノ ツミデ エ キソオ スルトユー コトン ナルト オモイマス。

認識的態度の場合は、評価的態度よりも、視聴者に向けられた発話が多くなっている。例⑨は、日本文学の男性専門家(a)が、1人でカメラに向かって発話したもの、例⑩は、男性アナウンサー(a)が、番組の進行を紹介する発話の直前で行ったものである(波下

線の「～と思います」は行為志向的態度)。

⑨標本0022「NHK市民大学」

a : (略) エー ソーユー トコロニ エー マナビト アソビノ チガイ ソシ  
テ エー マナビヨリモ アソビノ ホーオ オー モトモト ニホンジン  
ワ ヨリ イー ニンゲントシテ イチバン コー オー ニホンジントシ  
テ イチバン セーカツノ コンゲンノ モンダイト カンガエテイタユー  
コトオ オー オワカリニナッテイタダケルダロト オモイマス。

⑩標本0303「ETV8・人体・生理学からの最新報告」

a : アノ ジンタイノ セーメーノ ナゾニ セマル サイセンタンノ カガクオ  
サンヤレンゾクデ オツタエシテイマスガ キョーワ ソノ ダイサンヤ  
デス。 ワタシタチワ イッショーノ アイダニ ジューマンカイモ モノオ  
クチニ スルト イーマス。 ソレガ マー イブクロオ トーッテ チョ  
ーオ トーッテ ソノ カンニ ショーカシ エーヨーオ キューシューシ  
テクワケナンデスケレドモ エー オナカオ ワルク シタリ シマスト  
マ タイヘン ガックリ キタリ シマス。 マ ソレコソ ギャクニ イー  
マスト エーヨーキューシュー ショーカト ショーカ キューシュートユ  
ー コトガ エー セーメーノ イジニ キホンテキナ モンダイデアルト  
ユー コトガ マ ワカルト オモイマス。 ソシテ キョーワ マ ソノ  
イチバン タイセツナ ア エーヨーキューシューノ イッシュンオ クロ  
ーズアップシテイキタイト オモイマス。 エー スタジオニ オイデイタダ  
キマシタノワ アー シズオカケンリツダイガクノ ホシタケシキョージュ  
デス。 ヨロシク オネガイイタシマス。

#### 4.5. 行為志向的態度

評価的態度・認識態度のいずれとも異なって、アナウンサー類が視聴者に向けて発話する例が最も多く、次いで、専門家類が同じく視聴者に向けて発話する例が多い。この二つで、全体のほぼ半数を占める。例⑪は男性キャスター(a)の、例⑫は男性講師の、いずれも、番組の進行に関する行為志向的態度の表明である。

⑪標本0168「NHKスペシャル・外国人労働者激突討論開国か鎖国か」

a : エ ガイコクジンロードーシャノ ウケイレオ メグル ?ウ? カイコクカ



サコクカトユー ギロン イシカワヨシミサン サカイヤタイチサン ニ  
シオカンジサン ハセガワケーターサンニ トーロンシテイタダイテオリ  
マス。 エ サキホドマデワ ロードーリヨクブソクオ ドー スルノカトユ  
ー コトデ ギロンガ オコナワレマシタ。 コンドワ タイリヨーノ ガイ  
コクジンガ ハイッテキタ バアイ ニッポンノ シャカイワ ドー ナル  
カトユー モンダイデス。 エ スデニ ガイコクジンガ タクサン スミツ  
クヨーニ ナッタ イタバシクノ チョーナイカイノ カタガタノ イケン  
オ マズ ウカガッテミタイト オモイマス。

⑫標本0180「高等学校講座」

a : (略) エー コノ シュゴ ドーシ ホゴトユーノワ ココニ デテルンデス  
ガ エー キョー ベンキョーシナカッタデスヨッ?テ? ジカング タリ  
ナクテ ノコシチャッタンデスカッテ オッシャルカモシレマセンガ コレ  
ニツイテワデスネ ジカイ マダ エー キョー ヨンダ ホンブンオ モ  
ー イチド ヨム チャンスガ アリマスノデ ソノ トキニ エー モー  
イチド イマノ ブンケーノ トコロオ マトメテ ソシテ サラニ エ  
ー コノ サンバンメノ エ ブンケーデスネ コノ サンバンメノ ブン  
ケーニツイテ エ ベンキョーシテイキタイト オモイマス。 ソレデワ キ  
ョーワ ミナサン コノ ヘンデ。 サヨーナラ。

専門家類が同席者に発話する例もあるが、それらも、例⑬の男性書道家（a）のように、  
番組の進行に関する発話である（bは女性の聞き手）。

⑬標本0220「書道に親しむ」

a : エ。 コレワ モー チーサナ ヒーデスケドネー+

b : エー。

a : +アノ ナカニ カイテアル コト モチロン チョーセンモ レキシニ ノ  
コッテマセンカラ ナマエガ。

b : エー。

a : シカシ モジガネー レーショトシテワネ ヒジヨーニ イナカ?ク/グ?サ  
イ チカラズヨサトユーノガネ アルノデ ボク ダイスキナンデス。

b : イナカクサイ チカラズヨサデスカ。

a : ソーデス。 ソーデス。

b : ウーン。

a : →トカイテキナ チカラズヨサ。 エー←。

b : →?オナジヨーニ? コー ソボクナ←。 エー。 エー。

a : マー ソーユー フタツオ キョーワネ+

b : ハイ。

a : +ヤロート オモーンデス。

一方、一般人類の発話は、例⑭の男子高校生（h）のように、番組の進行にかかわるものではない。また、このとき、hは同席者=男性インタビュアー（e）に向かって発話しており、カメラ（視聴者）に向かって（いわゆるカメラ目線で）発話することはない。

⑭標本0167「青春すくらんぶる」

h : ントー ソツギョーシタラー トー カツオセンニ ノリタイト オモッテマ  
ス。

e : カツオセン。 ドンナ シゴト。

h : ントー イッポンズリデー ヤッパリ ジブンノ テデー サカナオ ツッテ  
ミタイト オモイマス。

例⑮は、例③と同じ番組の同じタレント（b）が、司会者として、カメラ（視聴者）に向かって話していたものが、「思います」の直前で、視線を隣に立つ女性アシスタント（a）に急に移動させて発話したもので、改まった口調は終始一貫しており、視聴者に向けた発話のバリエーションと考えることができる。

⑮標本0167「青春すくらんぶる」

a : コンニチワー。

b : コンチワ タナカヨシタケデス。

a : オガワノリコデス。

b : キョーノ セーションスクランブルワデスネー+

a : ハイ。

b : +ショクギョーコーコーデ ガンバトル ヒト?ダ/タ?ジオ トリアゲテ  
ミタイト オモイマス。

a : ハイ。

#### 4.6. まとめ

以上のように、試作版マルチメディア・コーパスを使って、一人称主語の述語「(～)思う」が発話される場面の映像を検索すると、評価的・認識的態度では専門家類や一般人類の、行為志向的態度ではアナウンサー類の発話が多く、また、評価的→認識的→行為志向的の順に視聴者に向かっての発話の割合が増えていくという傾向が観察される（とくに後者の傾向は、映像を参照することによって、はじめて確認できるものである）。これは、テレビ放送で、アナウンサー類・タレント類・専門家類・一般人類が、それぞれ、どのような役割を担っているか、そして、それぞれの役割に照らして、どのような聞き手に向かってどのような発話が許されているか、ということの反映ではないかと考えられる。南(1987)の「談話の十要素」でいえば、参加者と（話し手・聞き手が構成する）ネットワークとに關係するテレビ放送のあり方の反映であろう。

しかし、一方では、話し手の視線の先が同席者なのか視聴者なのか、はっきりせず、どちらともつかないような例も見られる。そのような場合には、話し手の視線が、カメラを見るでもなく、また、同席者を見るでもないといった状態になったり、例⑮のように、発話の途中で、カメラから同席者に視線を移したり、といった非言語行動が観察された。また、その口調（パラ言語）においても、視聴者向けなのか同席者向けなのか、あいまいな例も見受けられた。これらは、おそらく、視聴者と同席者とを同じように（直接の聞き手として）遇しようとする話し手の意向の現れであり、テレビ放送における話し手の役割と自らの意向との調整活動ともみなせるものである。

#### ⑮標本0359「ひるのプレゼント」

d : ソーデスネ。 マ アタクシモ アノ ヨンカイ ケッコンイタシマシタケド  
+

多 : <笑い>

d : +ナンデモ シッパイシテモ ケッコンワ スキデシテ+

b : フーン。

d : +デモ コンドノ マ ケッコンデ オワロート オモイマスケド トニカ  
ク ヘーボンデ アノー ヤッテイキタイト オモイマス。 ドーモ。 <笑  
い>

例⑮も、同席する司会者から意見を求められた女性タレントのゲスト（d）が、しばらくカメラ（視聴者）に向かって発話していたものの、最後の「ト オモイマス」の途中で急に、視線をカメラから司会者に移す例である。この場合、口調も改まっていて、最後ま

で視聴者に向かって話してもよさそうだが、視聴者と同席者との両方に配慮したいという、タレント類ならではの調整活動かもしれない。

いずれにせよ、テレビ放送における「(〜と) 思う」の使用には、話し手が誰を直接の聞き手として発話(態度表明)するかというネットワークの面での、テレビ放送のあり方を反映した明確な傾向差と、それと話し手の意向との微妙な食い違いを反映した中間的な使用とが、ともに見出される。

## 5. 今後の課題

ただし、以上の結果は、NHK(総合・教育)のみをデータとした試作版マルチメディア・コーパスの偏りを反映したものかもしれない。とくに、専門家類の発話の多さとタレント類の発話の少なさは、表1・2を比較してわかるように、NHKの番組特性による可能性が高い。今後、他のチャンネルのデータを追加するなどして、このコーパスの規模を拡大し、本格的な「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」を構築していくことが課題となる。

また、今回は、「(〜と) 思う」の音声上の特徴を分析することはできなかった。マルチメディア・コーパスの特徴は、映像だけでなく、音声も再生できるところにあるから、それを用いた分析が可能なコーパスにしていくことも今後の課題である。ただし、この方面には、「日本語話し言葉コーパス」(国立国語研究所(2006))というお手本があるので、それを参考にしていきたい。映像面に関していえば、もちろん、文字化テキストと映像との同期が粗いという問題がある。これについては、用いるソフトウェアなども検討して、より精度の高い同期をめざす必要がある。

このほか、試作版には、まだまだ不十分な点が多いが、「(〜と) 思う」のわずかな分析からも、映像を考慮した言語使用研究の可能性を示し得たものと思う。そして、重要なことは、冒頭にも述べたように、こうしたマルチメディア・コーパスを使って、文字化テキストと映像・音声とを同時に検索し、言語使用の研究に有用な情報を見出していくことである。映像から得られる非言語行動情報、音声から得られるパラ言語情報などは、その候補であり、それらをコード化してコーパスに付与するとともに、それらから(文字化テキストの)言語項目を検索することも考える必要がある。これについては、上の「日本語話し言葉コーパス」のほか、ATRメディア情報科学研究所の「インタラクション・コーパス」(坊農(2008))、フランス語ジェスチャーのデータベース“Geste et Parole”(モンルドン(2001))などが参考になる。いずれにせよ、残された課題は大きい。

## 注

- 1) たとえば、Biber他（1998）は、コーパスから見出せる言語使用のパターンに、ある言語項目が他の言語項目と関係して構成する言語内的なもの、ある言語項目が（状況＝レジスター、社会集団＝方言、時代などの）非言語項目と関係して構成する言語外的なものがあるとする。
- 2) 南（1987）は、話しことば・書きことばを問わず「常識的に見てなんらかの意味でひとまとまりになった言語表現」を「談話」、談話がつくりだされるコミュニケーション行動の動的な側面を「談話行動」としている。
- 3) ただし、南（1987）を収める国立国語研究所（1987）の「談話行動の総合テキスト」は、非言語行動の情報などがコード化されており、コーパス言語学の文脈では行われていないものの、ここでいう「言語使用研究のためのコーパス」の一つの実現形態を示すものとなっている。
- 4) 個々の話し手の職業・性別に関する情報の付与については、国立国語研究所（1995）の「第2部第7章」に詳しい。

## 参考文献

- 石井正彦（2002）「テレビの単語使用－番組と話者からみた多様性－」『国語論究 9 現代の位相研究』明治書院
- 国立国語研究所（1987）『談話行動の諸相―座談資料の分析―』三省堂
- 国立国語研究所（1995・97・99）『テレビ放送の語彙調査Ⅰ～Ⅲ』大日本図書
- 国立国語研究所（2006）『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所
- 坊農真弓（2008）『日本語会話における言語・非言語表現の動的構造に関する研究』ひつじ書房
- 南不二男（1987）「談話行動論」国立国語研究所（1987）所収
- 宮崎和人（2001）「動詞『思う』のモーダルな用法について」『現代日本語研究』8、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- モンルドン、ジャック（2001）「フランス語ジェスチャーのデータベース《Geste et Parole》」『日本語とフランス語―音声と非言語行動―』国立国語研究所
- Biber, Douglas, Susan Conrad and Randi Reppen. 1998. *Corpus Linguistics: Investigating Language Structure and Use*. Cambridge: Cambridge University Press. (齊藤俊雄他訳『コーパス言語学―言語構造と用法の研究―』南雲堂、2003)
- Richmond, Virginia P. and McCroskey, James C. 2003. *Nonverbal Behavior in Interpersonal Relations*. Allyn & Bacon. (山下耕二編訳『非言語行動の心理学―対人関係とコミュニケーション理解のために―』北大路書房、2006)

## 付記

本稿は、日本学術振興会平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「計量的言語使用研究のためのマルチメディア・コーパスに関する基礎的研究」（研究代表者：石井正彦）の研究成果の一部である。「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」の試作にあたって、データ利用の許可をくださったNHK、国立国語研究所に感謝申し上げます。また、同コーパスの作成にあたっては、孫栄爽、金姝伶、金愛蘭（いずれも大阪大学大学院生）3氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

（文学研究科准教授）